

学校教員による ESDの**評価**づくり

持続可能な社会づくりに貢献する学校をめざして



学校教員による ESDの評価づくり

持続可能な社会づくりに貢献する学校をめざして

目次

CONTENTS

事業概要 06

- 1. 事業の経緯 06
- 2. 事業の特徴 07
- 3. 2022年度事業について 07

第1部 学校/教員評価 08

- 1. 議論の経緯 08
- 2. ESD実践における学校・教員のあり方 11
- 3. 学校/教員評価の全体コンセプト 12
- 4. 評価フレームワーク 14
 - ① 教員評価 14
 - ② 学校評価 16
 - ③ 評価フレームワークの解説 18



【事業参加者の声】

- 学校/教員評価指標づくりの対面研究会に参加して 24
 - 大田区立大森第六中学校 柴崎裕子
 - 福岡教育大学附属小倉中学校 柴田康弘
 - 奈良県立国際高等学校 松本真紀

第2部 児童・生徒評価 26

- 1. アクションリサーチ 26
- 2. ESD評価フォーラム 27
 - ① 当日プログラム 27
 - ② 発表要旨 28
 - 学校で実践するESDの評価 全国小中学校環境教育研究会 棚橋乾
 - 学校教育分野におけるESDの評価 一実践報告一 気仙沼市立新城小学校 熊谷久恵
 - 社会教育分野におけるESDの評価 東海大学 池谷美衣子
 - 社会教育分野におけるESDの評価 神奈川県平塚市中央公民館 海老澤建志
 - ③ 海外有識者からのコメント 34
 - ドイツの学校で実践するESD クラウス・シリング ドイツ・ユネスコ国内委員会 Klaus Schilling
 - 学校・地域のESD評価、あるいは持続可能な社会の創造(報告の振り返りから) ホセ・ロベルト・ゲバラ ロイヤルメルボルン工科大学 José Roberto Guevara



【事業参加者の声】

- 児童・生徒評価のアクションリサーチに参加して 39
 - 新潟青陵高等学校 関山茂樹
 - 全国小中学校環境教育研究会 棚橋乾
 - 私学教員 米田謙三

まとめ 43

- 本事業の成果 - 事業参加者の職能成長の観点から 43



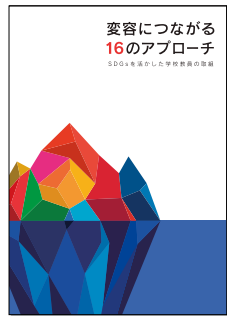
【事業参加者の声】

- ESDの評価に対する想い、事業への参加を通じて得た気づき・学びなど 44
 - 気仙沼市立新城小学校 熊谷久恵
 - 奈良市立平城小学校 新宮済
 - 大田区立大森第六中学校 柴崎裕子
 - 箕面こどもの森学園 佐野純
 - 福岡教育大学附属小倉中学校 柴田康弘
 - 北九州市立菅生中学校 小川亮
 - 関西学院千里国際中等部・高等部 松井健太郎
 - 奈良県立国際高等学校 松本真紀
 - 福山市立福山中・高等学校 上山晋平
 - 私学教員 米田謙三
 - 宮城教育大学・教授 市瀬智紀

事業概要

1. 事業の経緯

SDGs(持続可能な開発目標)に対する認知度、社会的関心の高まりを受けて、SDGs達成に寄与する人材育成としてますます ESD(持続可能な開発のための教育)の重要性が増しています。このような時代のニーズを背景に、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)では、学校現場におけるESDの実践をより具体的に掘り下げる一助とするため、2019年度より本事業を開始しました。

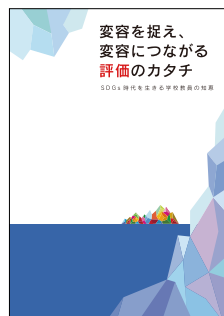


◀ 2019年度

カリキュラム・教材開発に焦点を当て、SDGs関連教材を用いた授業実践、SDGsの視点を取り入れたカリキュラムづくりや学校経営について、参加教員らの実践を持ち寄り、事例を紹介。

▶ 2020年度

優れた実践を継続するためには、カリキュラムや教材をつくるだけでなく、実践に対する適切な評価のプロセスが欠かせないとの意識から、ESDの評価のあり方を検討。目指す児童・生徒像、教員像、学校像を議論した上で、評価フレームワークを作成。



◀ 2021年度

前年度の議論をもとに、教員らのアクションリサーチをふまえて児童・生徒評価のモデル手法を開発。校種別グループに分かれ、各発達段階に応じた評価ツールを提案。並行して、学校/教員評価のフレームワークを再検討。



詳しい内容は冊子やウェブサイトにあります ▶ <https://www.accu.or.jp/programme/project/esd/>

2. 事業の特徴

事業を展開する上では、以下の点を大事にしてきました。

① 実践知を活かす

学校現場で ESDに取り組む教職員(実務者)、ESDや学校教育に精通した研究者、そして事業実施主体である ACCUの三者で共同研究チームを組み、現場目線のカリキュラムや評価手法の開発にこだわってきました。



豊富な事例や参加教員の想いを紹介し、学校の先生方がより具体的にイメージし、ご自身の現場で取り入れていただきやすいよう工夫しています。

② 「変容」と「エンパワメント」

ESDの本質は「持続可能な社会を目指して価値観や行動の変容を促すことである」との事業参加者間の共通認識から、児童・生徒、教職員、そして学校の「変容」をもたらす実践や学校文化とは何か、そしてどのようにその「変容」を測るか、という視点で議論してきました。また同時に、変化に伴う不安や負担、評価に対する抵抗感といったネガティブなイメージとは一線を画す、取り組むことで前向きになれるような「エンパワメント」の視点も大事にしてきました。

3. 2022年度事業について

児童・生徒の評価と教員や学校の評価は、それぞれを切り離して考えるのではなく、互いに連動させ関係性を把握しながら行うことが重要です。2021年度事業において、児童・生徒評価のモデル手法開発に取り組み、その成果として3つの具体的なツールを提案しました。一方で、学校/教員評価については十分に議論が進んでいなかったことを受け、2022年度事業では学校/教員評価に関して具体的な形で提案をすることを目標としました。また、児童・生徒評価のモデル手法の実効性検証にも取り組みました。

本書では、2022年度事業の詳細を第1部: 学校/教員評価、第2部: 児童・生徒評価に分けてご紹介いたします。

第1部

学校／教員評価

1. 議論の経緯

Step1 事業の方向性や本事業として目指す学校／教員評価のあり方を検討するにあたり、まず事業参加者を対象に事前アンケートを実施しました。そこで挙げた意見や前年度までの議論を整理するとともに、国内外の教育評価の動向や企業・行政などの現場における評価の事例について外部講師を招いて学び、イメージを膨らませました。そして、以下2つの視点を盛り込んだ評価づくりを進めることとなりました。

- ・ 持続可能な社会の創り手育成に資するESD実践力の向上
- ・ 教職員や児童・生徒のWell-beingの実現

Step2 上記2つの視点をふまえ、ACCUにて評価領域フレームワーク案(図1及び2)を作成しました。

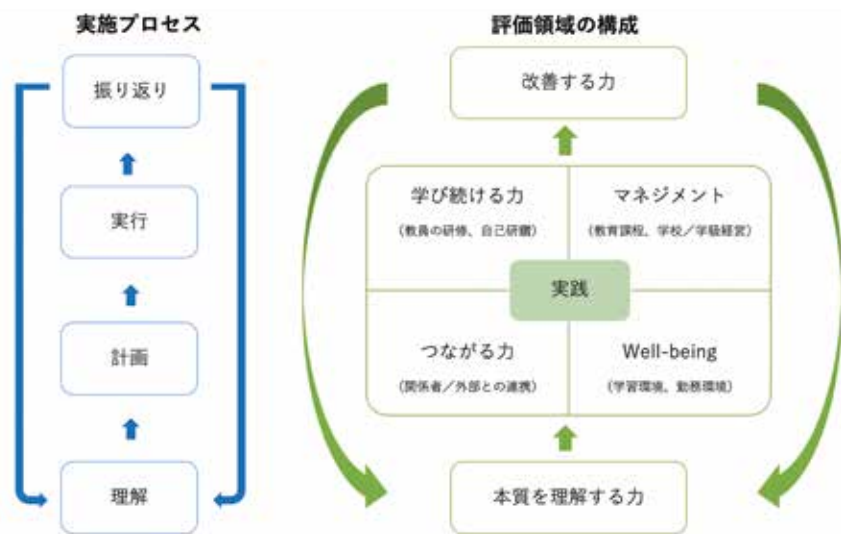


図1 実施プロセス
(出所)OECD (2015)を参照

図2 評価領域の構成
(出所)ACCU (2020, 2021)をもとに作成

ポイント

- ・ 学校と教員の評価を一体的に実施することを想定し、評価領域を共通の枠組みで整理
- ・ 2021年度までの事業(ACCU, 2021, 2022)で掲げられていた評価領域である下記①～④に、特に学校評価で重要となる⑤、及び本年度事業で重視する⑥の観点を追加して図2の形に再構成

- ① 本質を理解する力 ③ 学び続け改善する力 ⑤ マネジメント
- ② つながる力 ④ 実践する力 ⑥ Well-being

- ・ 問題解決プロセスモデル(図1)と照らし合わせ、領域間の関係性を図示

また、評価指標については、前年度までに議論してきた内容、及び国内外の公的な教育調査における既存の評価指標、国際的なフレームワーク、参加教員らが実際に現場で用いている評価指標などを参考に、上記①～⑥の領域に分類した評価指標案を作成しました(p.23 引用/参考文献・ウェブサイト等を参照)。議論のたたき台となるよう、この段階ではあえて積極的に整理せず、挙げられる限り多くの指標を挙げました。

【学校評価の指標】

学び続ける力		
項目		参考指標
1	学校を児童生徒と教職員が共に学ぶ場として捉えている	昨年度事業、Happy School
2	社会の状況を敏感に察知し、学校外から学ぶうとしている	昨年度事業
3	教育課程をESDの視点で捉えなおしている	昨年度事業
4	教職員同士が学びあう場を提供している	昨年度事業
5	社会情勢の変化に柔軟に対応しながら学習環境を提供している	昨年度事業
6	持続可能な未来のために学校の強みを分析し、学際的、分野横断的、マーケティング的なアプローチを試みている	ESD Teacher Competency
7	楽しく魅力ある指導と学習を支持している	Happy School
8	持続可能性のための学校の可能性を認識し、効果的な政策の要求や地域社会への積極的な貢献のための行動を起こしている	Green Comp
9	教職員のスキルや専門性を高めるための機会を提供し、また個人の自発的な努力を支持している	TALIS、Happy School
10	現状を批判的に分析(省察)し、新しいアイデアを取り入れて変革的な教育環境を創造しようとしている	TALIS、Green Comp、昨年度事業
11	変化に対して前向きな学校文化を醸成している	TALIS
12	問題を解決するための新しい方法を模索している	TALIS
13	児童生徒の文化的な多様性に適応した指導方法、学習環境を整えている	TALIS
14	児童生徒の視点・意見から学ぶ姿勢を持っている	TALIS

マネジメント

項目	参考指標	
1	カリキュラムにESDを位置づけ、またESDの視点で捉えなおしている	昨年度事業
2	ESDの実践に委員会活動、学校行事などの特別活動や課外活動を活用している	昨年度事業、Happy School

図3 評価指標案(一部抜粋)

Step3 Step 2で作成したフレームワークと指標案の改善点を議論し、以下のような意見が挙がりました。

フレームワーク

- ・ 領域の数が多すぎる
- ・ 実際には領域間の往還や重なりがあるはずだが、矢印で結ぶ構図や領域が明確に区別されているような図を示してしまうと、誤解が生じる恐れがある
- ・ 教員評価と学校評価を同じ領域でまとめようとすると無理が生じる
- ・ 抽象的な言葉より具体的な言葉で重要なことを明示した方が、現場では受け入れやすい

評価指標

- ・ 各領域下の指標の数が多すぎる
- ・ 内容の重複や文言の不統一を整理し、より現場の教職員に響く文言に変更する必要がある

これらの意見をもとに、ACCUと事業アドバイザー、参加者有志を交えて評価領域と構成を再検討し、領域の数を絞る、教員/学校の各評価領域を別の枠組みで捉えなおす、全体の構成イメージをコンセプト図としてまとめる、などの改善に取り組みました。

また、評価指標については対面の研究会を実施し、参加教員と事業アドバイザーがグループワークを通じて議論しました。ACCUが提示した指標案から特に重要と考える指標を抽出、現場感覚の文言に落とし込む作業を集中して行いました。

Step 1～3を経て最終的にまとめたものが、次項からの内容です。

2. ESD 実践における学校・教員のあり方

優れたESD実践を継続的に展開し、持続可能な社会の創り手の育成に貢献する学校や教員のあり方とはどのようなものか、本事業が考える必要な要素やそれらの関係性を以下の図4にまとめました。

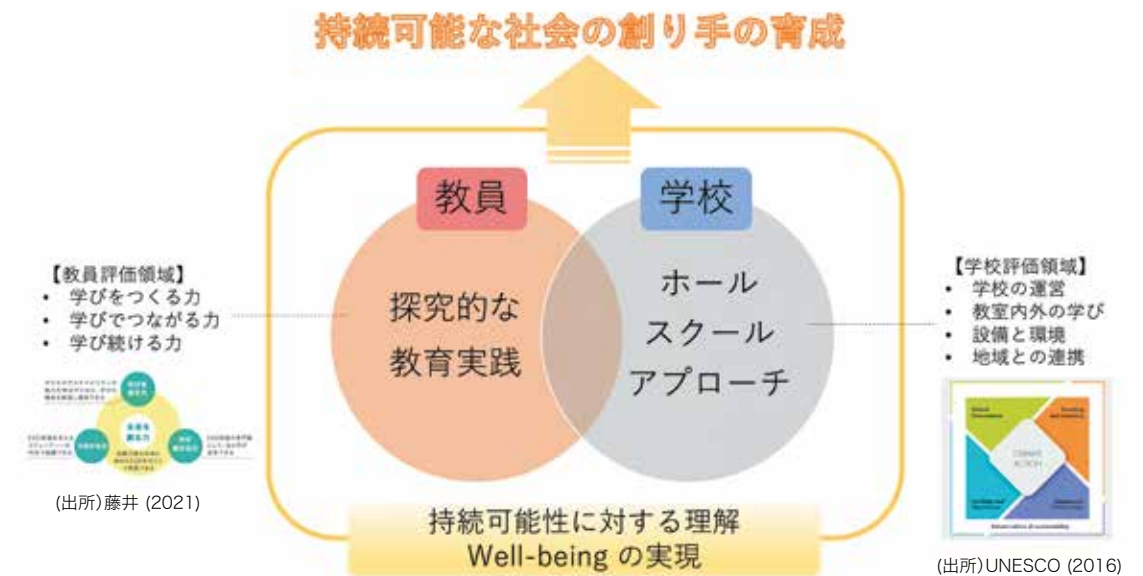


図4 ESD実践における学校・教員のあり方と評価領域
(出所) 藤井 (2021)と UNESCO (2016)をもとに ACCU作成

ポイント

- ・ ESD実践の土台として、学校全体及び個々の教員の持続可能性や Well-beingに対する理解とその実現を目指す日常的な意識・行動が前提となる
- ・ ESDを効果的に展開するには、教員の探究的な教育実践(指導)、学校のホールスクールアプローチによる組織運営の両輪が必要となる
- ・ 教員及び学校に求められる最も重要な上記の取組を実行するために、教員評価領域(3つ)と学校評価領域(4つ)を設定する

教員評価領域

… 前年度までの事業及び Asia-Pacific ESD Teacher Competency Frameworkをベースに設定

1. 学びをつくる力
2. 学びでつながる力
3. 学び続ける力

学校評価領域

… UNESCO ホールスクールアプローチ概念図をベースに設定

1. 学校の運営 (School Governance)
2. 教室内外の学び (Teaching and Learning)
3. 設備と環境 (Facilities and Operations)
4. 地域との連携 (Community Partnerships)

3. 学校／教員評価の全体コンセプト

評価を実施することで改善、成長していくポジティブなイメージを花が開く様子になぞらえ、前項で挙げた学校／教員評価において重要となる要素の全体的なコンセプトを図5にまとめました。

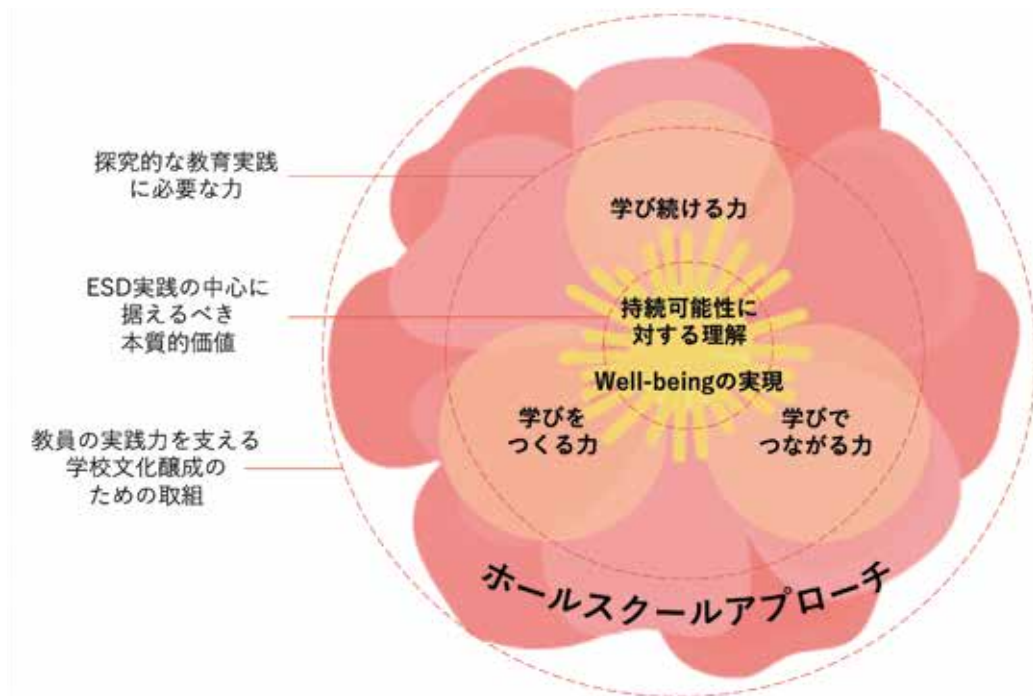


図5 学校／教員評価の全体コンセプト

ポイント

- ・ 学校・教員が持続可能性(Sustainability)や Well-beingに対する共通の価値観や行動様式をもち、本質的な価値を共有することが、ESD実践の根本(中心)となる
- ・ 学校がホールスクールアプローチに取り組み、教員の実践力を支える学校文化が醸成されることで、教員が探究的な活動や学習指導に前向きに取り組むようになり、実践力の向上につながっていく。重なる花びらが開いていくように、学校や教員の可能性も開花していく
- ・ 学校・教員の各評価領域は、段階的あるいは一方向にのみ進むものではなく、花びらのように重なり合い、相互に作用するものである

2. 及び 3. で説明してきた本事業が考えるESD評価におけるコンセプトに基づき、次項 4. では具体的な評価フレームワークとその解説を記載します。

4. 評価フレームワーク

① 教員評価

評価領域	評価指標		
学びをつくる力 Capacity to create learning	1	Agency (エージェンシー※、自分ごと化)	教員自身が自分ごととして課題に向き合っている
	2	Commitment (コミットメント、使命感)	教員自身が課題に没入し、熱意を持って取り組んでいる
	3	Collegiality (同僚性、連帯)	教科を超えて、同僚と互いの主体的な意思のもとに連帯している
	4	Flexibility (偶発性への寛容)	偶発性や変化を前向きに捉え、探究的な学習を促す教育を生み出して(デザインして)いる
	5	Accompanying (子どもに寄り添う姿勢)	振り返りをもとに、児童・生徒に合わせた学習・指導の内容や方法を具体化している
評価領域	評価指標		
学びでつながる力 Capacity to connect through learning	1	Connection (つながり、連携)	多様な背景を持つステークホルダー・コミュニティの人々とつながろうとしている
	2	Collaboration (協働、共同、協同)	授業／活動において、児童・生徒間のつながりを深めようとしている
	3	Sharing (対話、共有)	取組を対話に基づいて共有し、教員間に広げている
	4	Technology (ICTの活用)	授業／活動において、校外組織や国内外の学校とつながるためのツールを活用している
	5	Action (行動、発信)	企業やNPOなどの校外組織と連携して、取組を社会および世界に広げている
評価領域	評価指標		
学び続ける力 Capacity to continue learning	1	Open eyes on society (社会へのアンテナ)	社会情勢に柔軟に対応しながら学習を提供している
	2	Inquiry-based (探究的な実践)	探究的な学習や振り返りを実践している
	3	Self-improvement(自己研鑽)	ESDの視点で指導内容や方法の工夫・改善に努めている
	4	Capacity building(研修)	校内外の研修等を活用して教員同士で学び合い、ESDの実践力を高めている
	5	Learning with students (学び合い)	教師として、児童・生徒から(とともに)学ぼうとしている

※ エージェンシー：変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任を持って行動する能力 (OECD, 2019)

② 学校評価

評価領域	評価指標		
学校の運営 School Governance	1	Management (マネジメント)	学校経営方針や経営計画に ESDを位置づけ、学校全体で取り組んでいる
	2	Curriculum (教育課程)	すべての教科・領域を含む教育課程全体で ESDに取り組んでいる
	3	Respect (個性の尊重)	教職員や児童・生徒の個性を尊重し、個々に応じた活動の機会を設けている
	4	Teamwork (チームワーク)	教職員同士が助け合い、互いの挑戦を認める協力的な学校文化がある
	5	Well-being (働きがいと働きやすさ)	教職員のワークライフバランスに配慮している

評価領域	評価指標		
教室内外の学び Teaching and Learning	1	Cross-curricular/ grade learning (横断的な学び)	教科・領域、学年や学級をまたいだ学習を実施できる環境を整えている
	2	Extra-curricular activities (教科外の活動)	ESDの実践に特別活動や課外活動を活用している
	3	Proactive action (主体性)	児童・生徒の主体的な行動を促す学習を支援し、エンパワメントしている
	4	Autnomy (教師の裁量)	教員が一貫性のある指導を行うための裁量を認めている
	5	Learning place for all (学びの場)	学校を児童・生徒と教職員が共に学ぶ場と捉えている

評価領域	評価指標		
設備と環境 Facilities and Operations	1	Natural Environment (自然環境)	学校に自然のある環境をつくり、校内外の自然環境を ESDに活用している
	2	Facilities (施設・設備)	持続可能性に配慮した施設・設備の運営や環境の整備を行っている
	3	Resources (地元リソースの活用)	持続可能性に配慮した資材調達や校内ガイドラインの策定を行っている
	4	Diversity (多様性への配慮)	ユニバーサルデザインの要素がある設備・環境を整えている
	5	Mechanisms (連携の仕組み)	保護者、地域、行政や NPOなどのステークホルダーと持続的に連携できる仕組みを構築している

評価領域	評価指標		
地域との連携 Community Partnerships	1	Connection (つながり、発信)	保護者や地域住民(コミュニティ)へ積極的に情報発信し、信頼関係を構築している
	2	Partners (情報源、協力者)	持続可能な授業/活動において、国内外の学校や校外組織とつながるためのソース(企業や NPOなどの校外組織)を確保している
	3	Inclusion (インクルージョン)	多様なステークホルダー、コミュニティの人々とつながり、地域全体で ESD を継続的に推進している
	4	Support (教員へのサポート)	地域・校外での活動における教職員の主体性やつながりの構築を組織としてサポートしている
	5	Transformation (変革の主体)	「地域拠点」として学校インフラを活用し、学校が主体となって地域の活性化や課題解決に寄与している

③ 評価フレームワークの解説

フレームワークを実際に活用いただく際の参考に、各フレームワークに共通するポイント、指標ごとの解説、活用のヒントを紹介します。

共通

- 評価指標： 昨年度事業で提示された指標と、TALIS、ESD Teacher Competency、Green Comp、Happy Schools などの国際調査やプロジェクト、岡山 ESD推進協議会などの国内プロジェクトにおける質問項目やフレームワークの項目(p.23参照)を統合し、重複している部分を整理しました。国内外の教育評価の動向をふまえた上で、実務者である教職員が日本の文脈で捉えなおして抽出しているため、汎用的かつ現場感覚のある項目設定となっています。
- 構成： 各評価指標の要点を伝えるキーフレーズ(Connection、Sharing、Actionなど)を併記し、イメージをつかみやすくしています。

教員評価

学びをつくる力： 教員の課題意識と使命感・熱意／授業とカリキュラムをつくる／児童・生徒に寄り添う／学級をマネジメントする	
指標番号	解説
1	まず教員自身が課題意識をもち、本気で向き合うことが大切です。
2	教育が持続可能な社会の実現に貢献する可能性を信じ、使命感をもって取り組む姿勢が大切です。
3	同調ではなく、教員同士が自分自身の信念のもとに連帯していく関係性が大切です。教科横断型のカリキュラムと同僚性を構築し、教員間で活発な情報共有や提供を行うと同時に、熱量を共に上げていくことが学びをつくる力につながります。
4	探究的な学習においては、偶発的な事態が発生したり、予期せぬ方向へ展開したりすることに対して寛容な姿勢が大切です。そのためには、トップダウンではなく、教員自身が教育を生み出せる環境であることが前提となります。
5	児童・生徒の発達段階や理解・関心の度合いなどを見極め、適切な「困り感」（課題や目標）を設定していく力が求められます。彼らの様子を観察し、彼らの声に耳を傾けましょう。

学びでつながる力： 校内の活動同士をつなげる／学校の同僚とつながる／地元地域とつながる／国や世界の仲間とつながる	
指標番号	解説
1	学校は、今や国内・国外を問わずどんどん外部の人々とつながることが大切になってきています。
2	児童・生徒同士のつながりがきちんとできているか、協働・共同・協同の学びができていくかが大切です。
3	自分や他の先生方の取組をしっかりと互いに振り返り(リフレクション)、次のステップにつなげることが大切です。
4	ICTをいかに効果的に活用できるかがポイントになってきています。どの場面でどのように活用すればよいかをしっかりと見極めて使うリテラシー(情報モラルの視点も含む)が大切です。
5	特に学年が上がるにつれ、自分たちで考えた計画や実践を外部に発信できるかという点も大切になってきます。外部への発信は、活動へのフィードバックを得ることや、新たなつながりのきっかけにもなります。
学び続ける力： 社会情勢に対応する／新しい学びにチャレンジする／学びを省察する／学びを継続する	
指標番号	解説
1	社会情勢の変化は早く、新たな課題に直面したり、想定していた状況を上回ったりすることも珍しくない時代です。日々の学習指導にも社会の変化を敏感に察知し対応する柔軟な姿勢、行動が求められます。
2	自ら問いを設定し、体験・思考・協働を重ねて課題解決を目指す「探究的」な学習プロセスを児童・生徒に提供するとともに、教員自身も挑戦と試行錯誤を繰り返し、「探究的」に自分自身を高めていく姿勢が大切です。
3	従来の指導内容や指導方法を ESD の視点で捉えなおし、自身の現状を批判的に分析した上で、強みの活かし方や改善・発展のための方法を考えたり、新しいアイデアを積極的に取り入れたりすることが大切です。

4	研修等に積極的に参加することによって、知識やスキルの獲得のみならず、参加者同士の情報交換や学び合いを通じて実践力の向上が期待できます。
5	一方的に教えるのではなく、子どもたちから学ぶ／子どもたちとともに学ぶことを楽しめる教員であることが大切です。

学校評価

学校の運営: スクールガバナンス/School Governance 学校づくりについて考える場と参画するプロセス	
指標番号	解説
1	学校経営方針等に ESDを明確に位置づけることにより、内外に学校のビジョンを示し、ESDに根差した学校文化を醸成する土台となります。
2	学校全体でESDに取り組むカリキュラム・マネジメントを確立することが大切です。
3	それぞれの個性を尊重し、特性を活かして輝ける場づくりをすることが、幸せでポジティブな学校を形成します。
4	教職員同士の良好な関係は、個人、そして組織全体のパフォーマンスの向上につながり、円滑な学校運営に欠かせません。
5	教職員のウェルビーイングを重視し、生き生きと働ける環境を整えることが大切です。
教室内外の学び: 指導と学習/Teaching and Learning 教員と児童・生徒の学びの場とそのプロセス	
指標番号	解説
1	ESDは学際的、分野横断的な学びです。教科や学年の垣根を超えた学習活動を推進していくことが期待されます。
2	授業以外でも ESDは実践できます。様々な活動や行事を活用することで、可能性が広がります。

3	学校として、児童・生徒の主体性を引き出し、勇気づけるような働きかけを意識して行うことで、学習の質の向上につながります。
4	教員個人の裁量で一貫性のある学習をデザインし、最適な指導方法を判断できる環境を整える必要があります。
5	学校は子どもたちだけが学ぶ場ではありません。教職員をはじめ、学校に関わるすべての人が共に学ぶ場であるとの意識をもつことが大切です。
設備と環境: 設備と運営/Facilities and Operations 学校やその周辺の設備および設備を稼働させるための環境	
指標番号	解説
1	学校に自然環境があることは、ESDの学びの場や教材として活用することのメリットはもちろん、ウェルビーイングの観点からも重要です。
2	リサイクル、エネルギー消費量の削減、緑化などを意識した学校設備の運用や備品の使用に取り組むことが大切です。ESDルームやビオトープといった ESDを学ぶ施設・設備を整えることなども含めて検討してもよいでしょう。
3	地産地消を意識した給食食材や備品の調達をはじめ、ゴミの分別方法や校則など校内の様々なルールやガイドラインについても、地元のリソースや地域特性を考慮して最適な内容・方法を考えることが望まれます。
4	学校で過ごすすべての人にとって安全で快適な環境を整えることが大切です。
5	学校が周囲の関係者と持続的な連携体制を維持するために、協力者の登録制度や学校運営協議会などの組織的な連携の仕組みを整備することが有効です。
地域との連携: コミュニティとの連携/Community Partnerships 学校に関わる校外の人との連携	
指標番号	解説
1	特に保護者や地域との連携は重要です。クラス通信や HPや SNSを効果的に活用することが大切です。

2	学校として、児童・生徒の主体性を引き出し、勇気づけるような働きかけを意識して行うことで、学習の質の向上につながります。
3	外部との連携はますます必要になってきています。「リアル」に触れる機会をできるだけ多くもつことで、学びに向かうモチベーションも上がります。
4	教員が主体的に活動できるような体制を、学校が組織的に作ることが必要です。研修会への参加やリスキングも含めてサポートすることが大切です。
5	学校が「地域の拠点」となることで互いに活性化できることがたくさんあります。学校インフラの活用なども大切な視点です。

活用のヒント

- ここでは教員と学校の評価について提示し、児童・生徒評価とは分けていますが、「どのようなESDを実践するか」という目的や目標が根底でつながっていることをぜひ意識してご活用ください。
- これらの評価指標を活用するためには、ESDの実践が定着している状態であることが前提であり、ESDの実践をしたことのない教員/学校にとっては、「評価」は「実践」の次のステップになります。ただ、見方を変えれば実践における重要なポイント＝評価の観点となっているので、ESD初心者の教員/学校は実践の指針として活用していただければと思います。
- 教員委員会主催の教員研修などでご紹介、ご活用いただくことで、地域におけるESD推進の方向性が定まりやすくなることが期待できます。
- 上記の評価指標を活用して現場での実践をより多面的に捉える手段として、教員評価においては児童・生徒や同僚からのコメント、学校評価においては教員や保護者、地域の関係者によるコメントなどを得て、360度評価を実施することも考えられます。そうすることで、例えば、各評価領域においてバランスの良い教員がいたり特定の領域において秀でている教員がいたりすることなどが改めて見えてきます。この評価フレームワークを保護者や地域とも共有することで、より発展的な学校づくりにつながると期待されます。

© 編集協力(敬称略、順不同) :

宮城教育大学 / 市瀬智紀

関西学院千里国際中等部・高等部 / 松井健太郎

岡山大学 / 藤井浩樹

私学教員 / 米田謙三

全国小中学校環境教育研究会 / 棚橋乾

【引用文献】 藤井浩樹 (2021) 「ESDに取り組む教員の「変容」を捉える視点」 ACCU『変容を捉え、変容につながる評価のカタチ—SDGs時代を生きる学校教員の知恵』, p.92

<https://www.unesco-school.mext.go.jp/wp-content/uploads/2021/03/henyou2021.pdf>

UNESCO (2016) *Getting Climate-Ready A GUIDE FOR SCHOOLS ON CLIMATE ACTION*

<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000246740>

【参考文献】 ACCU (2021) 『変容を捉え、変容につながる評価のカタチ—SDGs時代を生きる学校教員の知恵』

<https://www.unesco-school.mext.go.jp/wp-content/uploads/2021/03/henyou2021.pdf>

ACCU (2022) 『変容を捉え、変容につながる評価のモデル—SDGs時代を生きる学校教員からの提案』

https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/06/hyouka_2021_A3.pdf

OECD教育研究革新センター (2015) 『メタ認知の教育学—生きる力を育む創造的数学力』明石書店, p. 90

岡山 ESD推進協議会 (2019) 『ESD 活動推進のための評価指針策定に向けた調査 —地域コミュニティでのESD 推進のための手引き作成に向けて— 平成 30年度報告書』

<https://www.city.okayama.jp/kurashi/cmsfiles/contents/0000022/22204/1.pdf>

岡山 ESD推進協議会 (2020) 『岡山発 地域で進める ESDの手引き』

<https://www.city.okayama.jp/kurashi/cmsfiles/contents/0000022/22204/000410994.pdf>

白井俊 (2020) 『OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来 :エージェンシー、資質・能力とカリキュラム』ミネルヴァ書房

露口健司・藤原文雄 (2021) 『子供の学力とウェルビーイングを高める教育長のリーダーシップ』学事出版

永田佳之・曾我幸代 (2017) 『新たな時代の ESD サステナブルな学校を創る—世界のホールスクールから学ぶ』明石書店

BIANCHI Guia; PISIOTIS Ulrike; CABRERA GIRALDEZ Marcelino (2021) *GreenComp: The European sustainability competence framework*. Publications Office of the European Union

https://joint-research-centre.ec.europa.eu/greencomp-european-sustainability-competence-framework_en

Okayama University (2020) *Guide for the Effective Dissemination of the Asia-Pacific ESD Teacher Competency Framework*

<http://ceteesd.ed.okayama-u.ac.jp/pdf/200511.pdf>

UNESCO (2016) *Happy schools! A framework for learner well-being in the Asia-Pacific*

<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000244140>

【ウェブサイト】 ACCU「学校 / 教員評価分科会」

https://www.accu.or.jp/programme/project/school_faculty_evaluation/

文部科学省「学校における業務改善について」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/uneishien/1297093.htm

文部科学省「TALIS(OECD国際教員指導環境調査)」

https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/data/Others/1349189.htm

OECD TALIS - *The OECD Teaching and Learning International Survey*

<https://www.oecd.org/education/talis/>

(URLの最終閲覧日: いずれも 2023年 2月 20日)



学校／教員評価指標づくりの対面研究会に参加して

(参加者所属は 2023 年 2 月当時のものです)

卒 直な意見として、研究会での議論はとても楽しかったです。コロナ禍にあって、オンラインでは議論が進まない中、対面で話し合いができ、お互いの表情を汲み取って、「今こんな意見を求めていたんだ」「私の意見は的外れでいたかな」など相手の様子を感じ取りながら話し合うということも必要なんだと感じました。それは決して忖度するというものではありません。

学校・教員の評価に必要な指標をまとめる作業においても、対面で付箋を貼りながら、模造紙に整理していくことで見えてくることがあり、原始的ではありますが、人と人との協議にはアナログ的な過程が実は効率的であることを改めて感じました。生徒の活動においても同様な気がします。

(大田区立大森第六中学校 柴崎裕子)

対 面でのワークショップ型の指標づくりは、成果だけでなくそのプロセスも含めて、学びになりました。自身とは異なる着眼点、気づかなかった視点などが、直接対話の途中で生み出される経験は、改めて貴重であると実感しました。

指標選定にあたっては、視点を定めることの一方で、誰でも活用可能な、汎用性のあるものを意識した作業を行いました。これまでの成果としての項目を、KJ法的にまとめながら絞り込んでいく作業は、悩ましいものでしたが、楽しいものでもありました。

このように我々が行った作業、すなわち評価の指標づくりそのものも、各学校におけるESD推進、理解促進には有効であると思いました。何よりも、目標を意識して実際に「考える」過程が実践なのだ、ということをもっと体験しました。本事業で提案する指標は、いわば“たたき台”であって、これをベースに各学校や地域で、独自の指標が生み出されることも、期待したいところです。

(福岡教育大学附属小倉中学校 柴田康弘)

指 標を決める際、「ESDで何が大切か」を議論しました。私たちのグループでは、「熱量」「本気」などがキーワードにありました。ESDは地球的規模でものごとを見なければなりません。

この先の見えない時代、まさに今、本気で取り組まなければサステイナブルではない、地球が危ない状況です。子どもも教員も学校も本気で問題の解決に向けて探究しなければなりません。子どもたちを本気にしなければなりません。その前に大人も本気にならなければなりません。みんなが協力しなければならぬのです。その指標が評価だと位置づけました。

現任校は先日1期生が巣立ったばかりの学校です。今の時代を生き抜く力を身につけ、未来を生きる子どもたちを育む学校であるために、ESDが必要であり、「探究」は教育活動の中心に据えられています。その活動での子どもたちの学びや成長をESDの視点で評価したい、そして、「背中を押す評価、元気になる評価」にしたい、2020年の研究会からその思いを持ち帰り、生徒の本気を測る探究の評価を学校全体で考えました。生徒自身ができることの喜びを感じ、私たちが背中を押す。評価要素一覧表*を参考に、教員全員で話し合い、探究のセルフチェックシートを作成しました。気負わないように、「評価」という言葉も使いません。

私たち大人も本気になって子どもたちの本気と向き合い、時には本気に火をつけなければなりません。世の中に溢れる簡単には解決しない問題を放棄せず、何度でもタックルする勇気を持てるか、私たちはその力を育むための伴走ができていくかどうか。数字に置き換えるのは簡単ではなく、どう見取るかについてもまだまだ考え続けなければならない課題ですが、今回の研究会では地球規模の目標とそのためにも育みたい力を常に意識していく勇気をいただきました。

* ACCU (2021)『変容を捉え、変容につながる評価のカタチ—SDGs時代を生きる学校教員の知恵』, p.13-14

<https://www.unesco-school.mext.go.jp/wp-content/uploads/2021/03/henyou2021.pdf>

(奈良県立国際高等学校 松本真紀)

第2部

児童・生徒評価

1. アクションリサーチ

2021年度事業で開発した児童・生徒評価モデル*(ACCU, 2022)の効果や有用性について、アクションリサーチを通じて検証しました。このアクションリサーチでは、本事業にご参加いただいている教員の方が評価を実施し、結果を分析することとしました。

- Step1** アクションリサーチの進め方を検討し、2021年度事業で開発したルーブリックをオンライン化して、評価実施の目的を以下の3つに設定しました。
- 1人1台端末の環境を活用し、オンラインで解答・集計をすることで、手作業をせず迅速に児童・生徒の意識を把握できるようにする
 - 参加校が児童・生徒の自己評価を実践し、自己の活動を振り返る機会とする
 - 集計結果から評価の有効性を確認し、自校のESDの改善充実を図るきっかけとする

Step2 Step1に挙げた目的をふまえ、小学校用、中学校・高等学校用の2種類のオンラインルーブリックの作成に着手しました。2021年度事業のルーブリックの質問項目から取捨選択、必要に応じて一部改良して質問を設定し、記述欄も設けました。Googleフォームで作成し、各校でコピーして使えるようにしました。

Step3 事業参加者の勤務校や知人の学校などで、完成したオンラインルーブリックを試行しました。各校で集計・分析し、児童・生徒の反応や集計結果からその有用性を検証しました。また、試行した教員にもアンケートを実施し、ツールとしての使い勝手や実施の意義について確認しました。



図1 小学校用オンラインルーブリック(抜粋)

アクションリサーチの結果は、「ESD評価フォーラム」(次項参照)にて報告しました。

* ACCU (2022)『変容を捉え、変容につながる評価のモデル—SDGs時代を生きる学校教員からの提案』
https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/06/hyouka_2021_A3.pdf

2. ESD評価フォーラム

国際的発信を含む成果の普及を目的に、「ESD評価フォーラム—学校と地域のESD評価から、持続可能な社会づくりを考える—」を開催しました。前項アクションリサーチの報告を含め、本事業が学校教育におけるESDの評価について取り組んできた内容を発表するとともに、社会教育分野のESDにおける評価、海外有識者らの視点も交え、ESDの評価というテーマから持続可能な社会づくりを展望しました。

① 当日プログラム

- 2023年2月23日(木・祝)16:00~18:00
- オンライン開催



ESD評価フォーラム — 学校と地域のESD評価から、持続可能な社会づくりを考える —	
16:00 開会	ACCU 教育協力部長 大安吉一 (趣旨説明) ユネスコ本部 ASPnet国際コーディネーター 斎藤珠里 (ESDと評価、学校と社会の連携について) モデレーター: ユネスコ・バンコク事務所 萬理加
16:15 事例紹介 (質疑応答含む)	① 学校教育分野におけるESDの評価 ESD評価手法開発事業より: 全国小中学校環境教育研究会 棚橋乾 (事業の概要) 気仙沼市立新城小学校 熊谷久恵 (実践発表)
16:55	② 社会教育分野におけるESDの評価 平塚市公民館事業より: 東海大学 池谷美衣子 (社会教育、公民館の概要、評価) 平塚市中央公民館 海老澤建志 (実践発表)
17:35 コメント	ドイツ・ユネスコ国内委員会 Klaus Schilling ロイヤルメルボルン工科大学 Jose Roberto Guevara
17:55 まとめ	ユネスコ・バンコク事務所 萬理加
18:00 閉会	ACCU 大安吉一

(登壇者所属は2023年2月当時のものです)

② 発表要旨

学校で実践するESDの評価

全国小中学校環境教育研究会 棚橋 乾

1. 学校におけるESDの実践と評価の現状

日本のESDは、1,100校を超えるユネスコスクールを中心に様々な活動が進められている一方、教員と児童・生徒が活動を振り返って評価し、活動内容や取組方法、学校体制を改善している学校は多く見られない。

そのような現状をふまえ、ESDの活動内容や実践方法を改善するための評価活動の普及と推進を図る取組を進めてきた。ACCUの事業において、ESDで育成する資質・能力を検討し、それらの資質・能力に合わせた目標標準型の評価のモデル手法として、児童・生徒の自己評価のためのルーブリックを開発した。

2. オンライン版ESDルーブリックの試行

【小学校版】

ユネスコが提案する「認知」「社会情動」「行動」の3領域(UNESCO, 2017, 2020)で資質・能力を整理した。集計結果からは、「持続可能性に関する知識・技能の習得」など比較的達成度の高い項目がある一方、「地域で活動する力」には課題が見られた。

【中学校・高等学校版】

学習指導要領の3つの柱「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力 人間性等」で資質・能力を整理した。「ESDの知識」や「自己肯定感」などの項目で比較的高い結果が出た。

3. まとめ

【児童・生徒評価から】

- ・ 自己評価をすることが、自己の活動を振り返るきっかけとなった。
- ・ ルーブリックの記述文から、今後どのように活動することが良いか気づくことができた。

【教員アンケートから】

- ・ 教員全員が、オンラインで評価し集計することに肯定的な意見を持っている。
- ・ 継続実施に肯定的な意見が85.7%であった。
- ・ ルーブリック評価によって、ある程度児童・生徒の意識を掴むことができたと考えられる。
- ・ ポートフォリオ評価など他の評価と併用することで、より正しい評価にすることができると考えられる。

【今後の課題】

- ・ ESDによって児童・生徒が変容するためには、自己の活動を振り返り評価することが欠かせない。そのための取り組みやすい方法としてオンラインルーブリックによる評価方法を広めることが求められる。
- ・ この評価方法を広めるためには、各校でESDによって育成する資質・能力を決めることやルーブリック作成の解説などのマニュアルを作成することが必要である。



【参考文献】

UNESCO (2017) *Education for Sustainable Development Goals Learning Objectives*
<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000247444>

UNESCO (2020)『持続可能な開発目標のための教育—学習目標—』
<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000374449>

学校教育分野におけるESDの評価 —実践報告—

気仙沼市立新城小学校 熊谷久恵

1. はじめに

宮城県の北東部、美しいリアスの海岸線を有する水産業と観光のまち、気仙沼市では、多くの学校が「森」「川」「海」の豊かな自然環境を生かした環境教育、食教育、防災教育等の特色ある活動を展開している。

今回は「個性を生かす教育を重視し、共に学び、たくましく心豊かな子供の育成」を学校目標に、「確かな学力の育成」「豊かな心の育成」「たくましい心と身体の育成」「ふるさと愛・地域愛の育成」の4つのプランのもと、楽しい学校創りに取り組む気仙沼市立A小学校の5、6年生64人が、児童・生徒評価手法開発グループが作成した「オンライン版ESDルーブリック」に取り組み、持続可能性に関する知識・スキル習得など13観点について自己評価した。

2. 「オンライン版 ESDルーブリック」の試行から分かったこと

(1) 子供の姿

その結果、A校の6年生では、④問題解決能力、⑥コミュニケーション能力、②批判的思考力、5年生では、⑨持続可能性への価値観、②批判的思考力に対する意識が高く、どちらの学年も⑫社会参画力、⑩主体性に対する肯定的な回答率が低いことがわかった。

6年生と5年生を比較すると、資質能力の肯定的な回答率はほぼ同じ傾向だが、6年生は5年生と比較すると④問題解決能力に対する意識が著しく高く、5年生は⑨持続可能性への価値観が高い様子が伺えた。

自由記述では、6年生ではエネルギーやまちづくりに関する内容が、5年生は自然環境や文化伝承に関わる記述が多く見られた。6年生の記述からは、社会との関わりを強く感じた。

オンラインでの評価について、児童は「取り組みやすい」「短い時間で答えられる」という利点を挙げていた。その一方で、「意味の分からない言葉があった」「じっくり考えられるから手書きがいい」という回答もあった。

(2) 「オンライン版 ESDルーブリック」のよさと課題

- ① **よさ**
- ルーブリックを行った後の結果は、すぐに子供たちと共有することができた。子供はそれにより自分自身の学習を振り返り、今後の活動について考えることができた。これは、ICT活用の利点ともいえる。

児童



- ポートフォリオ評価を併用することで、子供自身がより成長を実感することができた。

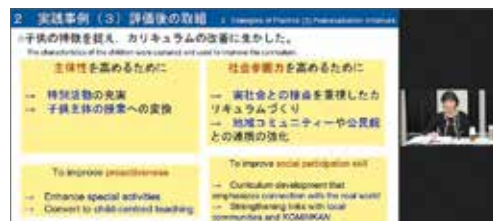
教員



- ルーブリックを作成する過程で、育成したい資質・能力に対して子供が成長していく姿を明確にすることができた。
- 教職員間で調査結果を共有し、カリキュラムの改善に生かした。課題とされる資質・能力を高めるための教育活動の見直しに活用することができる。

② 課題

- ・ 「学びと評価の一体化」に向けて、ルーブリックの内容は子供に事前に知らせておく必要がある。子供自身がルーブリックの作成や改訂に参加する機会があってもいい。
- ・ 学校の特色、子供の実態や思考に寄り添いながら、評価項目や内容、方法を改善していくことが大切だと考える。



社会教育分野におけるESDの評価

東海大学 池谷美衣子

1. 日本におけるESD推進と地域社会

日本において、ESDは学校教育分野を中心に推進されてきた。そのなかでは、公民館に代表される社会教育施設は、学校のカリキュラムである探究学習における「連携先」として位置づけられてきた。他方、社会教育の主要な舞台となる地域社会は、子どもたちを含んで人々が日常生活を営む場である。ESDの学びは学校教育だけでは不十分であり、私たちの日常生活を変容させてこそ、意味と力をもつ。そのためには、ESDについて学校で学んだ子どもたちから大人たちが学ぶこと、そして、子どもと大人がともに学び実践することが必要であり、これがESD推進における社会教育の役割であろう。

しかし、学校のESDカリキュラムを公民館でも講座にすればよい、というほど単純ではない。学校教育に比べると、社会教育には次の3つの特徴がある。一つ目に、社会教育には学校のような入学や卒業、学年という時間軸がない。子どもに見られる一方向の成長や発達ではなく、世代による発達や学習特性の違いがあり、かつ、多世代が交わって学ぶ。それぞれ暮らしのリズムや年中行事など地域のサイクルの中で社会教育は実践を重ねるものであり、学校教育とは異なる時間感覚の中にある。二つ目に、社会教育には全国統一的なカリキュラムや教科書がない。政策で掲げられた目標を遂行するという教育形式ではなく、住民のニーズや地域の課題によって社会教育の内容は実に多様である。三つ目に、学校教育のように全員を動かす強制力がない。社会教育はあくまでも人びとの権利であり、社会教育に参加しない自由もある。いつ何をどのような方法で学ぶのか決めるのも学習者自身であり、自己主導で学習がすすむ。これらの特徴を踏まえて、ESDやその評価について考えてみたい。

2. 社会教育分野における評価の特徴

(1) 学習者による自己評価が基本

社会教育分野には、資格取得に関わる学びを除いて、基本的に試験や成績が存在しない。したがって、学習者の自己評価が基本となる。①「誰が評価するのか」は学習者自身ということになるが、社会教育の特徴はそれを個人ではなく集団的に捉える点にある。②「何を評価するのか」も、外部から評価項目が示されるのではなく、学習者自身(たち)が大事にしていることについて、気づきや変化が重視される。③「どのように評価するのか」も多様であり、表現や実践を介することが多い(書く、発

表す、展示する、伝える、選択する、行動するなど)。ここでの自己評価とは自己理解を深めるもので、これが集団的に行われることで相互理解を深めることへとつながっていく。

(2) 職員の学習過程としての事業評価

もう一つ、社会教育分野の評価として、主催講座などに対する事業評価がある。①「誰が行うのか」の基本は、事業を企画した社会教育職員であり、企画に関わった住民を含む場合もある。②「何を評価するのか」は、事業の成果だけでなく、企画～準備～実施～成果のプロセス全体が対象となる。③「どのように評価するのか」については、事業担当職員による省察を軸にしながら、職員集団による話し合いや、基礎自治体・県・全国などさまざまなレベルでの研修等での実践報告とディスカッションなどがそれに該当する。事業評価に取り組むことが、職員にとってエンパワーメントの機会になっているといえる。

3. 変容をうながす学びの場を地域に創り出す

ESDのキーワードの一つは、変容である。住民(生活者)の価値観やライフスタイルの変容、地域組織の活動目的・内容・方法の変容、そして、地域コミュニティやシステムの変容など、持続可能な社会のために期待される変容は多岐にわたる。しかし、どれだけ必要な変容だとしても、これまで安定して続いてきたライフスタイルや地域の暮らしを変えることには、痛みや抵抗を、ときには住民間の分断も伴うことがありうる。地域で ESDを推進する上で、変容に伴って経験される痛みや抵抗についてはもっと議論されてよいだろう。

社会教育分野では、ESDを冠した新規事業を立ち上げることも十分に可能である。しかし、それ以上に、それぞれの地域で継続されてきた事業の意義を丁寧に見直しながら、ESDを名乗らずともESDの価値観を実現する事業へと再構築するという方法もある。遠回りにみえるこの方法は、変容に伴って住民や地域が経験する痛みや抵抗を少しでも緩和するための知恵でもあるのではないだろうか。

【参考資料】

佐賀県立生涯学習センター編『課題解決支援おうえん BOOK』2022年 3月発行
https://www.avance.or.jp/syougai/_1354/_5297.html

社会教育分野におけるESDの評価

神奈川県平塚市中央公民館 海老澤建志

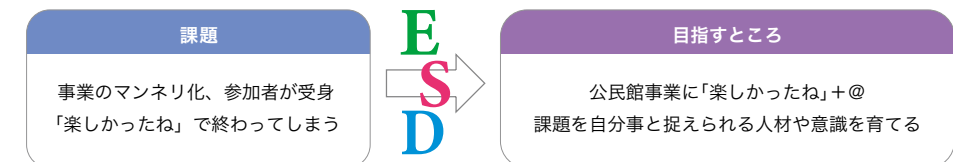
■ 平塚市と公民館の概要

神奈川県中南部に位置。1932年市制施行、人口257,649人(2023.1.1)、面積67.88km²
地区公民館25館、中央公民館(統括館) 1館。ほぼ1小学校に1公民館の割合で配置

■ 公民館事業

平塚市の公民館では、各館の地区内の住民を対象とし、様々な年代の方に学習機会を提供。家庭教育学級、児童・生徒地域参加事業、シニア学級等があり、1講座は原則1時間30分以上。2018年度は約34,000人が参加

■ ESDの取り組み： 2019年4月 ACCU公民館研究グループの事業協働地域に



初年度は、これまで実施している事業の内容をそのままに、何を学んでほしいか、身に付けて欲しいかという概念や目指すところを磨き、取り組んだ。先進市である岡山市の指標を基に評価を実施。

■ 独自の評価の仕組み nadeshiko view

2022年、平塚市の公民館事業に合う指標を作成。市民の花である「なでしこ」の5枚の花びらにちなんで5つの指標。気づき・未来・自分事・様々な視点・協力。客観的評価となるよう、点数の目安を設定。全ての事業(講座)で振り返りを実施し、ESD度を100点満点で評価。

■ ESD度100点 「海と山の探検隊」

2日間の公民館事業。海上周遊、ウォークラリー。海から街を見る、自然(山)の中のウォークラリーで発見を記録するなど。



何もしないと失われる世界がある。
「なでしこ」の花のように健気に、ときに風に身をまかせながら、
寄り添い輝く持続可能な未来へ

③ 海外有識者からのコメント

ドイツの学校で実践するESD

クラウス・シリリング
ドイツ・ユネスコ国内委員会 Klaus Schilling

1. ドイツにおけるホールスクールアプローチの実施

近年、ドイツのユネスコスクールにおける、ホールスクールアプローチ実施の重要なステップとして、以下の事業があります。① 26校によるユネスコ気候アクションプロジェクトへの参加(2016年～2018年)、② ユネスコスクールの 200人以上が参加した連邦外務省でのホールスクールアプローチに関する校長会議(2019年)、③ 30校が参加してホールスクール・アプローチを実施する 3年間事業(2019年～2021年)。これらの事業から得た知見を共有し、ホールスクールアプローチの実施を他のすべての学校に奨励するために、2021年の全国ユネスコスクール・デジタル会議(300人参加)と、2022年のプロジェクト記念日を利用して、学校の変革を促しました。

2019年からのホールスクールアプローチ3年間事業は、ドイツ連邦環境財団の財政支援を受けて、会議、ワークショップ、オンラインウェビナーで構成され、さらに参加校への専門家の訪問や学校からの参加者による学び合いも行われました。参加校からは校長、教師、生徒からなるチームで様々なイベントに参加しました。

2. ホールスクールアプローチを実施するための8つの分野

上記のプログラムでは、参加校は「ESD for 2030」におけるホールスクールアプローチの枠組みで、学校の全体的な変革のための様々な分野に取り組みました。

- | | | |
|------------|---------------|--------------|
| 1. 学校経営の構造 | 4. 教師教育 | 7. 質向上/評価 |
| 2. 学習と指導 | 5. 施設基盤(インフラ) | 8. コミュニケーション |
| 3. 青少年の参加 | 6. 協力とパートナー | |

ホールスクールアプローチのコンセプトと実施基準を紹介した後、各校に現状を分析してもらい、2～3の分野で達成したい初期目標について話し合ってもらいました。多くの参加校は、学校における若者の参加機会の拡大や、インフラの緑化を目標に掲げました。その後数か月間、8つの行動分野すべてについて、専門家の意見を交えた特別セッションを開催しました。各校がお互いの経験を共有する時間も十分に設けられ、それぞれが最善と考えるアイデアを共有し、今後の活動に向けて互いに助け合うことができました。

パンデミックの時期にも、このプロセスが大きな成功を収めたことを、嬉しく思っています。プ

プロジェクトの評価は、ドイツにおけるESDの第一人者であるマティアス・バルト(Matthias Barth)教授によって行われました。彼の評価は、データ、文書の分析、様々な学校とステークホルダー・グループとのインタビューに基づいています。彼はプロジェクトがそれぞれの学校で、新しい仕組みを導入するために利用されたことを強調しました。プロジェクトからの知見と、学校を変革するための約25の具体的なステップとアイデアは、ドイツ・ユネスコ国内委員会の2022年3月の出版物や、様々なワークショップや記事で共有されています。



学校・地域のESD評価、あるいは持続可能な社会の創造 (報告の振り返りから)

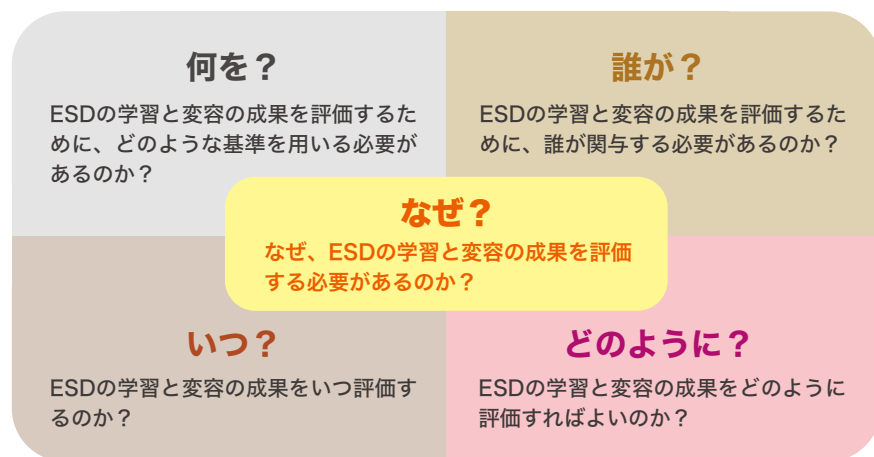
ホセ・ロベルト・ゲバラ
ロイヤルメルボルン工科大学 Jose Roberto Guevara

ESDの評価とは、単に学んだことを測定することではなく、持続可能な開発というビジョンの達成にどのように貢献しているかを知るために、私たちが取り組んできた変容を認識することです。より持続可能な未来のための学習と変容を達成するためには、ESDは、「なぜ」「何を」「どのように」「誰が」「いつ」評価するのかを再考するよう私たちに求めています。

海老澤さんの報告では、平塚市における社会教育の評価は、ESDの学習と変容の成果を評価する必要がある理由を最も明確に述べていました。なぜなら、彼が言うように、「今までと同じことを続けていては、失われる世界がある」からです。また、地球温暖化や自然破壊のようなグローバルな問題がある一方で、高齢化や出生率の低下のようなローカルな問題を特定し、なぜESDが必要なのか、

なぜ ESD の学習と変容の成果を評価する必要があるのか、地元文脈から明らかにすることが非常に重要であるとしています。平塚の報告にあるように、私たちの ESD の取組が変化に寄与しているのか、それとも単に同じことを続けているに過ぎないのかを知る必要があります。私たちは、その変化が一夜にして起こるものではないことを知っています。しかし、私たちが少しずつでも変化をもたらしているかどうかを知るためには、変化を評価する必要があります。

“ ESD は、学習と変容を達成するために、なぜ、何を、どのように、誰が、いつ、評価するのかを再考することを求めている。 ”



平塚市の報告は、「なぜ」に関して、私たちが解決しようとしている問題だけでなく、私たちが達成しようとしているビジョン「誰一人取り残さない持続可能な社会の実現と、様々な問題を自分の問題として捉えることができる人材と意識の育成」であることを改めて気づかせてくれました。持続可能な社会の実現だけでなく、誰一人取り残さない、公平な社会の実現を目指すことです。これが、私たちがESDを推進する理由です。私が「なぜ」を図の中心に据えた理由もここにあります。すなわち、私たちが、なぜするのか、何をするのか、の核心なのです。

「何を」については、チェックリストやルーブリックが学習したことを評価するのに役立つ一方で、熊谷さんの報告からは、これらの個々の知識、スキル、多様なコンピテンシーが、個々人の知識と技術、様々なコンピテンシーが一緒になって本当の意味での学習の結果となることを再認識しました。これらの要素を一緒にすることは、ESDの中心的なコンセプトである、持続可能な開発の全体的かつ統合的な性質と一致しており、しばしば社会、経済、環境の3つの側面としてまとめら

れます。しかし、今回の報告から、グローバルな枠組みに基づいたチェックリストやルーブリックを使うことはできても、ESDを評価するための「何を」は、地域の学校やコミュニティの現実に根ざしたものでなければならないことが示されました。

ESDの学習と変容の成果を評価するために誰が関与する必要があるかという点で、どの報告も興味深く、また ESDらしいと感じたのは、生徒、教師、学校、地域社会など、すべての人が関与しなければならないという認識があったことです。そうであれば、私たちは皆学んでいるのだから、ESDの評価にも私たち全員が関わらなければならないでしょう。このことは、池谷さんの報告にある「探究学習や地域実践では、私たち全員が『協働者』とみなされる」という言葉にも表れています。この報告では、ESDを通じて、大人が子どもたちから、そして子どもたちとともに学ぶ可能性があることを指摘しています。

それなのに、なぜ学校評価プロジェクトでは、生徒が学んだことを評価するだけなのでしょう？ 教師が自分たちの学びを評価する機会はなかったのでしょうか。学校ではよくあることですが、何を学んだかをテストされるのは生徒だけなのです。私たちは、テストするのではなく、教師が何を学んでいるのかを評価することを考えるべきかもしれません。スライドを見直すと、棚橋さんは、教師が ESD の指導法の評価に関わることを述べていますが、これはやはり教師が何を学んでいるのかを評価することとは異なります。しかし、公民館ではそうではなく、池谷さんが学習とエンパワーメントのプロセスとして職員の活動評価を実施したことを報告しています。

これらの報告では、ルーブリックやチェックリストは便利なツールではあるが、あくまでもツールであることを明確に示しています。ESDを評価する方法の核となるのは、「振り返り」であり、活動に携わったすべての人による「自省」の重要性です。この振り返りの重要性は、ユネスコ・バンコク事務所が ACCU やアジア太平洋の他の組織とともに 2021 年に作成したガイドブックでも取り上げられています。「Reflect-Share-Act (振り返り - 共有 - 行動): 持続可能な開発のためのコミュニティの教育へのガイド」と題されたこのガイドブックでは、ESDの教育や評価に対する予め規定されたアプローチから脱却する必要性を主張し、代わりに「振り返り」の中心性を明らかにしています。

ESDの学習と変容の成果は、どのように評価するのでしょうか？ もちろん、私たちはプロジェクトやワークショップの終了時に評価を行います。しかし、私は、学習や変容が継続的であるのと同じように、評価も継続的でなければならないと主張します。なぜ最後まで待つのでしょうか？ 何らかの形で継続的な評価(モニタリングと呼ぶ人もいるかもしれませんが)を行うことができれば、その結果、私たちが何を達成し、その過程でどのように改善すればよいかをより迅速に特定することができます。

まとめると、



何を評価するのか : 評価基準は、持続可能な開発の全体的かつ統合的な概念に関連する ESD の知識から導かれる必要があります。チェックリストやルーブリックは有用ですが、これらのツールは、特定の要素を明らかにするだけでなく、これらの要素間の相互関係を強調する必要があります。ESDの全体的かつ統合的な性質を真に理解するために必要です。さらに、本質的な学びのためには、チェックリストやルーブリックのこれらの要素は、SDGsのようなグローバルなものとのつながりを保ちながら、ローカルなものに根ざしている必要があります。

誰が関わるのか : 生徒、教師、学校、地域社会など、すべての人が関わる必要があります。私たちは皆、学習者であり、また私たち自身の学習の評価者でもあるのです。

どのように評価するのか : 私たちはいくつかのツールを特定しましたが、ESDの評価には内省、特に「振り返り」が重要であることを認識しました。

いつ評価するのか : 成果を称え、継続的な改善を図るためには、学習と変容の評価を継続的に行う必要があることを確認しました。

しかし、冒頭で述べたように、「何を」「誰が」「どのように」「いつ」評価するのかの中心にあるのは、「なぜ」評価するのかです。ESDの中心的な目的と理由は、私たちが達成したいと願う、より持続可能で公平な社会というビジョンを達成するために、私たちが直面するローカルとグローバルの複数の相互に関連する問題に対処する必要性にあります。

そのために私たちは何をするのか。私たちが共にこの学びの旅を続けていく中で、皆さんのご健勝を祈念しています。

児童生徒評価のアクションリサーチに参加して

(参加者所属は 2023 年 2 月当時のものです)

E SDを学ぶ生徒の自己評価フォームの作成に関わらせていただきました。今年度の取組は、Googleフォームを使った汎用的な評価方法の開発と実践でした。そして、その成果物を勤務校で今年度の探究学習を総括する際に使わせていただきました。

自己評価フォームを作成する過程で、当初のアイデアでは高校生用の自己評価フォームがすべて記述式となっており、汎用的な評価フォームに適しないのではないかとことから、ヴィジュアル・アナログ・スケール法(VAS法)を多用することとなりました。例えば、「現在起こっている地球的な課題である持続可能な開発のための目標(SDGs)を知っている」という問いに対して、

1. ほとんどできない・意識がない
2. ときどきできる・たまに意識する
3. たいていできる・意識している
4. よくできる・常に意識している

として、アンケートフォームにおいて、「1・2・3・4」から回答を選択させるものです。これによって確かにアンケート自体はとても短時間で実施しやすくなりましたが、実際にやってみると更に課題も見えてきました。

「知っているか」という問いに対して、確かに上記のような「意識」の程度についての VAS法による回答が合っていると思いますが、「持続可能性に関する取組について情報検索・情報収集する技能を身に付けている」という問いには合っていません。なぜなら、技能とは具体的に「～ができる」という記述でないと答えられないからです。例えば、次のように具体的に選択肢を提示しないと生徒は何を聞かれているのか当惑するのではないのでしょうか。

1. ほとんど、自分で調べられない
2. インターネットなどで検索し、関連サイトを閲覧することができる
3. 統計サイトなどでデータを探せる
4. 書籍や論文などから新しい知識や考え方を更に学ぶことができる

私は、このように一問ずつ選択肢を具体的に説明しながら、生徒たちにこの自己評価フォームに回答してもらうようにしました。VAS法による1～4の選択肢について、具体的な説明がない場合には、口頭で説明しながら進めました。また質問自体が抽象的な印象を与えるものもあります。例えば、「他者に影響を与えることができた」などです。生徒たちによっては、こうした抽象的な言葉には直感的に答えることができないかもしれません。抽象的な言葉を、例えばこの場合、「他者」といった言葉を、場合によっては教員が具体的な内容に置き換えて理解しやすくする必要があります。仲間、クラスメイト、家族、近所の人達、そして名も知らぬ人々に…実は、こうした言語活動にこそ、より良い学びのための改良とチャレンジの余地があるのかもしれません。

しかし一方で、このような説明がなくとも「何となく」答えることが可能であることが、VAS法の良いところだとも言えます。とりあえず、使ってほしいと思います。私は教員用の集計画面を黒板にプロジェクターで投影して、生徒たちに自分たちの回答が全体としてどのようなものかを見せながら自己評価フォームによるアンケートをおこないました。クラスからの回答が随時集計され棒グラフでビジュアル化される様子は圧巻です。生徒たちは、自己評価をしながら、クラス内で学びのコンセンサスの構築をおこなうことができるのです。この自己評価の取組を通して、生徒たちはESDの学びの目的を理解し、自分の達成度を確認します。そして、そうした自己評価が同時にクラスメイトたちとの相互的なパフォーマンスとして機能し、「そうあるべきだ」と生徒たちが内面的に、自発的に、目標に向き合うことができるのは素晴らしいことです。教員が「～しろと指示した」からではないのです。

さて、教員にとって現実的に大変なのは、探究活動の総括として、要録などへの評価の記載だと思います。場合によっては、試行錯誤の過程においては、評価ルーブリックから作成した典型的な文言を「評価」としてコピー&ペーストで記載することもよくあることではないでしょうか。例えば、「課題を発見し、我が事として向き合い、仲間と協力して真摯に解決策を導き出すことができた」などです。一方で、日々生徒に向き合い、限られた時間の中で格闘しながらも、少しでも生徒に寄り添い、彼らの実態に近い記録を残したいと忸怩たる思いを抱えているはずです。そうしたときに、今回の評価フォームは、生徒たち一人ひとりが、しっかりと自分の経験と学びを記述することもできるように作られています。同時に、我々が必要な記録のための「材料」もしっかりと提供してくれるものになっていると思いました。

(新潟青陵高等学校 関山茂樹)

E SDは児童生徒主体の学びや活動ですから、評価も自己評価として活動の一部に組み込むことで、生徒が自己を振り返り、活動をより良くすることの一助にしたいと考えました。自己評価をする際に、できないことを突き付けるような記述を避けました。ESDが嫌いになっては元も子ありません。次は頑張ろうと思える記述を心がけました。

試行の際に実施した教員アンケートから、評価の取り組みやすさは大切だと再認識しました。「これならやれる」程度のオンラインルーブリックから始めて、活動しっぱなしではなく、育成する資質・能力に合わせて評価をすることが定着してくれることを願っています。

個人的には、これまで取り組んできたESDの評価研究の一部が活用できてよかったです。2021年度に作成したルーブリックは、小中高で形式が異なり、試行する際に苦慮しました。小中も、本来のルーブリック形式の小学校と、アンケート形式の中学校との違いをどう受け止めるか困りました。議論に参加して、話し合うことでルーブリックや実施の手順の不備な部分を直すことができました。また、設問に説明文を入れたり、自由記述を追加したりしました。中高版に合わせたり、教員アンケートを作ったり、今後の日程調整、学校選び、マニュアルの分担もできました。

課題は、小中高の統一した形式にしなくてもよいのか検討することと、このオンラインルーブリックによる評価活動をいかに広めるかです。研究会の試行で終わらせず、なんとかオンラインルーブリックの普及に取り組みたいと思います。

学校でESDの評価を実施する場合は、指標が「持続可能な社会づくり」を実践する上で必要な資質・能力かどうか、振り返りがあると良いです。行動が求められている現在、行動する項目は必須です。全体として、認知・非認知・行動でまとめるのがよいと思います。

少し前の資料ですが、UNESCOの『Learning Objectives』*にある資質・能力を小中高で共通して使うこともアリではないかと思えます。

* UNESCO (2017) *Education for Sustainable Development Goals Learning Objectives*
<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000247444>

(全国小中学校環境教育研究会 棚橋乾)

前

年度開発した評価ツールの効果や有用性について、アクションリサーチを通じて検証するというので、フォームを作成して実際にアンケートを取りました。小学生向けと中高生向けに分けて作成し、中高生版は自由記述の欄を設けたのでより具体的な回答を得ることができました。生徒たちからのアンケートをもとに、次年度以降取組も改善していこうと考えています。

【生徒のアンケート回答から一部抜粋】

Q 「自分で課題を見つけて取り組むことができたか？」

- 学校内でLGBTQIA+の理解を深める活動に入って、イベントを企画、運営している
- 電気の節電に家族で今月から取り組むようになった

まとめ

Q 「学び」について何か自分自身変わったことはあるか？

- 自分のやりたいことを学ぶようになった
- 自分の意見を伝え、人の意見を聞くことで物事をより客観的に判断できるようになった
- 電気の無駄遣いでどういった被害が出るのかをテレビで見て、そこから私もより意識して生活しなければいけないと思うようになった

Q 「自分が成長したと思うことはあるか？(自律・協働・貢献など)

- 自分のことを大切にしながら行動することができた
- 自分の得意なところを生かして貢献して、自分が苦手だと思う分野では他の人のフォロワーとしてリーダーを支えられるようになった
- テレビなどで SDGsの番組を見てより詳しく知りたいと思い、調べる機会が増えた

(私学教員 米田謙三)

《本事業の成果》 事業参加者の職能成長の観点から



学習指導要領に「持続可能な社会の創り手の育成」が掲げられ、学校現場における ESDの重要性が増す中、本事業は4年間にわたり、その当事者である学校の先生方とともに ESDの普及とより質の高い実践を目指して、真剣に取り組んできました。

主な事業成果は本書及び過去の制作物等に記載してきたとおりですが、この事業へ参加してくださった先生方自身にも、少なからずプラスの影響があったようです。価値観や行動の変化、モチベーションの向上、キャリアの開拓、今後の目標設定など、事業を通じてご自身の成長や変化を感じてくださった方が多くいらっしゃいました。教員としての職能成長やネットワークの広がりといい面も、本事業の大きな成果の一つと考えています。

事業を実施してきた ACCUも、参加者の皆様の熱量に感動し、励まされ、多くの学びを得ることができました。事業に賛同し、ご協力いただいた参加者やアドバイザーの皆様に、この場を借りて深く感謝の意を表します。

本書を手にとってくださった皆様にも、ぜひ事業参加者の熱い想いを受け取っていただけたら幸いです。



ESD の評価に対する想い、 事業への参加を通じて得た気づき・学びなど

(参加者所属は 2023 年 2 月当時のものです)

E SDでは、体験してよかったことだけでなく、考えが広がったり深まったりしたこと、生活の中に結び付けられたこと、自己の成長など質の高まりを評価するようにしています。

今回、グループで考えた児童生徒評価のオンラインツールを予備的ルーブリックとして、学校の学習内容やプロセス、児童の実態に合わせて改訂して使ってみたいと思います。目指す姿を年度初めに子どもに示し、子ども自身の振り返りを分析しながら、学習計画やルーブリックを改善していきます。一人一台端末を生かし、eポートフォリオの可能性も探っていききたいと思います。

他校の先生方との話し合いを通して、自分のもっていない視点や ESDで高めていきたい新たな資質・能力に気付くことができたことは、大きな収穫でした。これからもみんなで「Well-being」な学校を作っていきます。

(気仙沼市立新城小学校 熊谷久恵)

事 業に参加したことで、個人として ESDの実践力の向上と学校としてホールスクールアプローチの推進を成すことができました。

前者については、ESDの醍醐味である価値観や行動の変革に向けて、経験則で行ってきた授業を、評価を活用して客観的に見取り、効果的に単元展開を組み変えて実践できるようになりました。継続して行うルーブリック評価による児童の見取りは、コロナ禍において限られた体験や出会いづくり、またオンラインによる学校間交流での学びづくりにおいて大きく役立ちました。2021年度の研修やグループワークを通じて、ESD評価を開発し取り入れた実践が、今年度「ちゅうでん教育大賞」に選ばれ、受賞式で行った研究報告では多くの教員に ESDの授業づくりを評価していただくことができました。

後者については、本事業に参加しているユネスコスクール全国大会で実践提供するような学校のミドルリーダーや、ESDを牽引する研究者、管理職の方などを行うESDの授業づくりの議論を通じて、

最新のESDの知見や学校で成果をあげた推進の手立てを学ぶことができました。参加した3年間で、一個人の授業づくりからホールスクールアプローチの重要性について考えるようになり、議論を通じて本校での言語化を図りました。本校のホールスクールアプローチが2021年度博報堂奨励賞に選ばれたのも、この経験があったからと感謝しています。事業で得た知見を奈良の教員に伝え、ESDをさらに推進していきたいと考えます。

(奈良市立平城小学校 新宮済)

本 事業にかかわってからずっと大切に続けてきたことが、発達段階に応じた内発的自己変容です。特に中学校では3年間の変化、成長は著しく、教師のかかわり方によって視点をどこに向けるかが大きく異なってきます。中学校3年間の学習は、自己理解を深め、自分の周り(=地域)、とりまく社会、世界に目を向け、他者に対して自分が何をすべきか、できるのかを考えさせることができる時間であると考えます。利他の精神を持つことが、自分の学びの本質につながります。そのきっかけづくりをしてあげることが、教師の大切な役割だと感じます。

ESDの評価にあたって、自己肯定感を持たせるためのきっかけになるのが、学校の間であり、地域での活動であると考え、実践を伴うESDの価値観を大切にしてきました。

本事業に携わることで、全国のESD識者と協議したり、考えをまとめる時間があったことはとても価値のある時間で、もしこの場にESDを知らない方が加わっても、おそらく、興奮し、感動し、何かを語らざるにはられないような空間であったと思われれます。本事業に4年間関わったことは、私にとって大きな意味があり、今後の教育界へも大きな影響を与えるような成果物ができるのではないかと、ワクワクすることができました。

できるならば、多くの人にESDの意義を知ってもらえたら、さらに成果が高まると感じます。

(大田区立大森第六中学校 柴崎裕子)

E SDは、各自が当事者意識を持って身近な課題や地球規模の課題について知り、それに対して今の自分が何をすることを考え、実践することが大切です。その出発点はまず主体である自分と向き合うことです。自分とは何者で、どんなことが好きで、どんなことが得意、あるいは苦手かに目を向け、その時の自分をそのまま受け入れることができるという「自己肯定感」を大事にしたいと考え、その項目をわかりやすく評価に取り入れることを提案しました。これが土台にあると、各自が自分の興味関心をきっかけに知識を広げたり、技能を身につけたりすることができます。その上で他者を尊重し、協働していくことができれば、より大きな影響を生み出すことができます。

困難だったことは評価項目を整理していくことです。大切にしたい項目はたくさんあり、削って

いくことが非常に難しく、汎用性をどこまで求めるのか、各校の特色や地域性を活かした形でアレンジして使っていただくにはどのようにすれば良いかを検討しましたが、まだ思うような提案ができていません。それでも結論を出すことより議論し続けていくことが大切だと思います。

やはり ESDの実践には「ホールスクールアプローチ」が欠かせません。評価指標を検討することを通して、学校全体のビジョンを見直したり、学校の中で共有したりすることができるような取組を、より多くの学校で生み出していくことができないかと考えています。

(箕面こどもの森学園 佐野純)

E SDは未来に向けた持続可能な取組を志向します。それは、他者との対話なくして成立しません。それはこのうちの評価についても同様です。評価、とりわけ教育の評価は、ある活動を目指に向かって調整してゆく営みです。それは、結果としての価値付けである「評定」を下したり、与えたりすることにとどまらず、関わる人に、(良い意味での)「変容をもたらすもの」でなければならぬと考えます。その意味で、評価とは、教師→生徒への一方向のみならず、生徒自身、あるいは生徒→生徒や、生徒→教師も俎上に上げ、対話的な情報共有が大事であると思っています。

本事業では、そうした評価の土台にあたる部分を、それぞれ参加者の対話を通して構築する営みが主でした。校種はもちろん、世代や地域を超えて、多様な信念や価値観をぶつけ合う議論は、自身を振り返り、相対化する上で欠かせない活動でした。このことは、子どもたちに提供すべき、授業においても同様であると思っています。我々が行う活動に意味があるとすれば、それはそのまま授業にも適用可能である、そうした考えが芽生えました。こうした刺激的な活動は、教育に関わり続ける限り、生涯にわたって必要です。折に触れて、その機会に参画していく姿勢だけは忘れずにいたいと思います。

近年、コロナ禍の産物としてのオンライン会議が有益なツールとなりました。時間、距離を気にせず開催できる大きなメリットの一方で、対面での議論がいかに重要で、大切なのかも実感しています。状況に応じた可変的な取り扱いを目指したいものです。

(福岡教育大学附属小倉中学校 柴田康弘)

私 は中学校特別支援学級の担当をしています。特別支援学級に通っている生徒は他者との比較から自己肯定感が低い傾向にあります。そこで、ESDの評価作成において私が重視したことは、「様々な特性や課題をもった子どもにも対応することができる」「地域や社会の多様な課題に対応し、長期に渡って使用することができる」「生徒自身が自己の成長や変化を感じ、次の活動に活かすことができる」という3点です。

私の所属する中学校特別支援学級でも、実際に事業で考案したESDの評価表を使用してみました。様々な特性や課題をもっている子どもたちですが、活動ごとに評価表を使って自身の活動を振り返ることで、次の活動や自身の苦手なことに対して意欲的に取り組めるようになりました。

私はこの事業に参加して4年目になりますが、毎年この事業を楽しみにしています。事業に参加し、全国で活躍する先生方と共に活動することで、教師として新たな学びや発見があり、現場に戻って子どもたちの教育に活かすことができるからです。また、自己の教育理念や考えを再確認することができ、教師として自信をもって教育に携わることができています。

今後も私自身が学び続けることで、子どもたちにより質の高い教育を提供することができたらと考えています。

(北九州市立菅生中学校 小川亮)

本 事業に参加するまでは、他の校種におけるESDの取組や評価について十分に知ることができていませんでした。定期的に意見交換をする場を設けていただくことで、所属先での低学年次と高学年次の評価の基準について、校種間における評価の接続を意識することができるようになりました。

本事業への参加は、教職員としてのキャリアに多大な影響を与えました。具体的には、公立高校でのESDの実践を踏まえて、現所属先のような国籍や使用言語が様々で校種の幅も広い学校においてESDはどのように実践することができるのか探求したくなり、2022年度は1年間かけて模索することができました。現所属先で帰国生と目の前で日々接していると、3年間ESDの評価項目や評価基準について考え続けながら、授業で実践し、立ち振る舞い続けてきたことが活きているのを実感できます。

その過程で、現在ESDをフォーマルに評価するのかインフォーマルにするのかによって、活用するルーブリックの種類も変わってくるのではないかと改めて考えるようになりました。ESDの評価について考え続け実践し続けることは、持続可能な社会の構築に向けての一つの有効な手だてであると考えます。

(関西学院千里国際中等部・高等部 松井健太郎)

2 019年夏からこの事業に参加しています。異校種のESDを実践する教員の皆さんと交流することができました。持続可能な社会の作り手を育む、という同じ志を持ち、それぞれの教育現場において子どもたちの発達段階に応じてどのような取組をしているのかを知ることができました。ひとりの子どもが成長するそれぞれの過程での「変容」がつながっていくことの大切さ、異

校種の教員の実践の共有・協働の大切さを感じました。また、ESDの視点で日々の教育活動におけるキーワードを見つけることもできました。

2年目以降はその活動や子どもたちの変容をいかに評価できるか、について考えました。「評価」というと、子どもたちに緊張感を与えるように感じます。大人にとっても同じです。外から見られること、「できない」ことを指摘されることへの緊張です。しかし、身につけてほしい力や到達してほしいゴールはあります。ESDの視点で、「持続可能な社会の担い手を育む」学校であるか、教員であるか、その力を子どもたちは身につけているか、根本を見直すことができました。子どもたちに緊張を与えるのではなく、子どもたちの背中を押す評価を目指したいと思いました。私たち大人への評価についても、ESDの視点で自分たちを評価ができなければ、実践が未来につながるのかどうか分からない、しっかり振り返ることができる、ESDの評価を取り入れたいと思うようになりました。

(奈良県立国際高等学校 松本真紀)

E SDの評価で私が大事に思っていることは、「学校の各種目標とのすり合わせ」と「振り返り」です。前者について述べると、学校にはすでに「学校の教育目標」や「特に育成したい資質・能力」などの指標があるはずで、それらとうまくすり合わせを図ることが、ESDの取組と評価の持続可能性を高めると考えます。指標が複数あり、それぞれがバラバラだと、教員も生徒も普段から意識できません。すると方向性がそろわず、取組も一過性のものになりがちです。

2つ目に大切なのは、「振り返り」です。これは、ESDの評価をルーブリックで行う「だけ」では、不十分ということです。ルーブリックの数値を出して、教員と生徒で共有し、不十分な項目については、先生方は指導の改善につなげ、生徒は今後伸ばすよう、さらに意識する必要があると考えます。指標は重要なものに厳選されているはずなので、評価を出したら無理なく分析して改善につなげる取組が大切です。

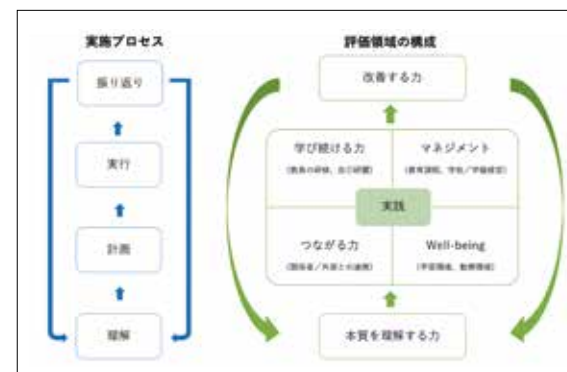
私が、この事業に参加してよかったと思うのは、熱意と経験にあふれた先生方とのつながりです。コロナ禍においてもオンラインを通して先生方とつながることができたことは、大きな収穫です。中には、オンラインで出会った先生の学校に訪問し、学ばせていただく機会を得ることもできました。今後はきっと対面での研修会もますます増えるでしょう。今回のオンラインでの出会いを、リアルな再会につなげることができるのが楽しみです。

(福山市立福山中・高等学校 上山晋平)

最 初からこの事業に参加させていただいていますが、学校評価と教員評価は本当にうまく結びつかないと逆効果になると考えています。今回はESDというキーワードをもとに目指す

ゴールの明確化と「持続可能な社会の創り手」育成を目指す学校や教員に求められる指標やそのための評価方法の提案ということで本当にいい学びをさせていただきました。

今年度はp.8図1及び2の表が本当に学びのポイントになりました。各領域について議論を深め、より深く考えることができました。



このプロセスと構図をもとに次年度以降教科、課外活動などに組み込んでいこうと考えています。でも大切なことは、目の前にいる生徒・児童・子ども達の成長や発達を第一に考えることです。そのためにも今回の領域を生徒・児童・子ども達の実態に合わせて、きちんと評価し、次の段階の教育実践に活かしていきたいと考えています。

(私学教員 米田謙三)

E SDは、人類に課せられた解のない諸課題に対して教育現場から解決に挑む教育であることから、ESDの評価では、固定的な到達目標を設定することについては意味がないことを本事業で学びました。また、生徒や教員主体の民主主義的な教室運営、学校運営を推進する評価であるということを重視すべきだと考えます。

本事業への参加を通して、特に2020年度と2021年度の議論において、異なる学校種の先生方と共に議論することによって、小中高等学校における資質・能力の発達段階ということ意識化できるようになりました。2021年度には、実際の学校の評価データを見せていただける機会があり、それを活用してデータの可視化に取り組むことができました。

また本事業を通して、ESD、学力、非認知能力間の関係について考える機会となりました。評価データをもとに、実践主体で語られてきたESDが、実践に加えて科学的に議論されていくようになることを期待しています。

(宮城教育大学・教授 市瀬智紀)

※事業アドバイザー

学校教員による ESDの評価づくり

持続可能な社会づくりに貢献する学校をめざして

発行日	2023年 2月 28日
発行	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) 東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル TEL : 03-5577-2852 FAX : 03-5577-2854 URL : https://www.accu.or.jp/
編集	ACCU
執筆・協力者(五十音順)	新宮済、池谷美衣子、市瀬智紀、ト部匡司、海老澤建志、大安喜一、 小川亮、上山晋平、熊谷久恵、佐野純、柴崎裕子、柴田康弘、関山茂樹、 棚橋乾、藤井浩樹、藤本早恵子、松井健太郎、松本真紀、米田謙三、 Klaus Schilling、Jose Roberto Guevara
デザイン・印刷・製本	株式会社デザイン・モイ (アートディレクション / 今泉明子、デザイン / 高井美月)

©ユネスコ・アジア文化センター2023
ISBN978-4-909607-14-0

Printed in Japan 禁無断転載・複製
この冊子は文部科学省「2022年度ユネスコ活動費補助金」で作成されました。

